

運動の楽しさと技能の高まりを実感する授業づくり ～細分化した動きの提示と運動の場の設定を通して～

＜主張＞

本実践では、「楽しさの共有」、「動きの細分化」、「運動の場の設定」の3つの手立てを軸に単元を構成した。

「楽しさの共有」では、児童にその単元の運動の楽しさを問い掛け、運動を楽しむために高めるべき技能を明らかにした。「動きの細分化」では、一連の動きを細分化して提示し、よい動きのポイントを考えさせた。「運動の場の設定」では、児童の考えや願いをもとに複数の運動の場を設定し、児童が自己の課題に応じて選択できるようにした。

結果、運動に苦手意識をもつ児童を含めた多くの児童が、運動を楽しむことができた。さらに、動きのポイントを言語化したり、技能の高まりを実感したりすることにつながった。

1 主題設定の理由

学習指導要領では、健康で豊かなスポーツライフを実現するために、「運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有する」という指針を示している。また、中央教育審議会では、「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されている。「学習の個性化」とは、「基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子どもの興味・関心に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身が学習が最適となるよう調整する。(中央教育審議会 R3.1.26)」と示されている。

また、これまでの自身の体育授業を振り返ると、「みんなで同じことをし、みんなで同じ楽しさを味わおう」という、技能習得を中心とした一斉指導や特定の楽しさに焦点を当てた指導が多くなりがちであった。

そこで、スポーツの多様な楽しみ方を児童から引き出し、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することに焦点を当てて授業づくりを行うことが必要だと考えた。

児童一人一人が運動の楽しさを見出したり、よりよい動き方を考えたりする姿、運動を楽しみ、技能の高まりを実感する姿を目指し、本実践を行った。

2 実践内容

(1) 対象

実践1：令和4年度 G市立G小学校5年1組(26名)

実践2：令和5年度 G市立A小学校5年1組(36名)

(2) 単元について

本実践では、全ての児童にとって未体験の運動であり、技能差のないボール運動のネット型で「テニピン」を扱った。手に段ボールで作成したラケットを付けて、ボールを打ち合うテニスを基にした易しいゲームである。

単元名	運動のもつ特性	運動の楽しさ	習得を目指す技能
ボール運動 「テニピン」 (ネット型) 【全6時間】	<ul style="list-style-type: none"> 攻守一体型で、ボールを打つ。 ボールを打ち返しやすい位置に動いて打つ。 相手の動きを予測して打つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との協力により、ラリーをつなげること。 相手との攻防、かけひきによる得点を取ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ボールを打ち返しやすい位置に動く。 ねらったところに打つ。 強弱をコントロールして打つ。

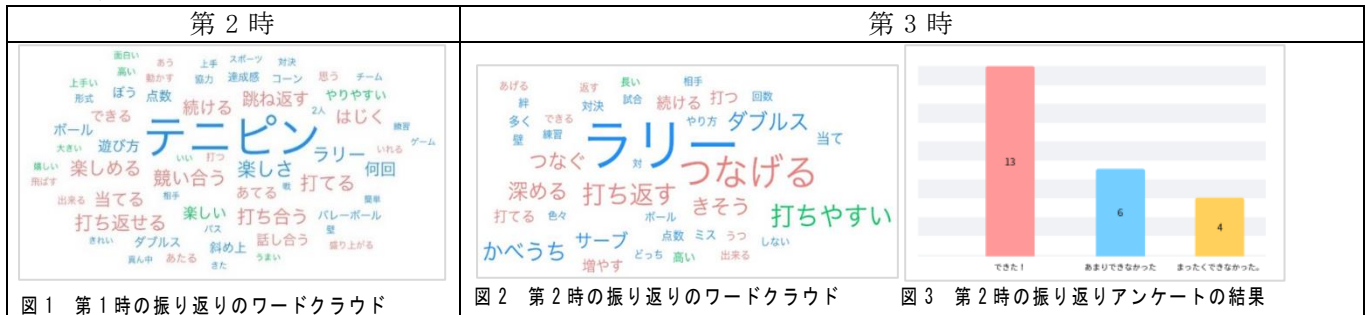
(3) 具体的な手立て

手立て①楽しさの共有	手立て②動きの細分化	手立て③運動の場の設定
<ul style="list-style-type: none"> ○テニピンの楽しさを問い掛け、楽しみ方を言語化させ、共有する。 ○テニピンを楽しむために、解決すべき課題(困り感)を共有する。(実践2) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ボールを打ち返す動きを「ボールを待つ」「ボールに動く」「ボールを打つ」の3つの運動局面に細分化し、動きのポイントを考えさせ、言語化させる。 ○運動局面に加え、体の動かし方を再分化して、動きのポイントを言語化、共有させる。(実践2) 	<ul style="list-style-type: none"> ○見つけたポイントを高めるための運動の場を設定し、児童の願いや課題に応じた運動ができるようにする。 ○「ラリーをつなぐゲーム」か「ラリーを断ち切るゲーム」のいずれかを選択できるようにする。

3 実践1の実際と考察

(1) 楽しさの共有について

第2時、第3時では、それぞれの前時の振り返りの記述について、テキストマイニング(図1, 2)を活用し、ワードクラウドとして児童に提示し、「ラリーをつなげること」が楽しさであることを共有した。また、第3時には、振り返りのアンケート結果(図3)を活用したことで、児童は楽しむためには、技能の向上が必要であることに気付いていた。



「打ち合う」「打ち返す」「ラリー」「続ける」という言葉をもとに、「ボールを打ち返して、ラリーをつなぐこと」がテニピンの楽しさであることを共有した。

「ラリー」「つなげる」「打ちやすい」などの言葉に着目させ、ラリーをつなげることがテニピンの楽しさであることを再度確認した。さらに、振り返りのアンケートの結果を示し、ラリーをつなげることができずにもやもやしている児童が半数近くいることから、テニピンを楽しむようにするために必要な技能に着目させた。

(2) 動きの細分化について

第3時では、課題設定場面における児童との対話を通して、ラリーをつなぐための一連の動きを「ボールを待つ」「ボールに動く」「ボールを打つ」の3つの運動局面に細分化し、グループごとに動きのポイントを探らせた。各グループの意見をもとに、全体で動きのポイントを共有した。共有場面では、児童の発言に対して「なぜ?」や「それをするとどんな良いことがあるの?」などと問い返したり、実際に全員で体を動かしたりしながら、児童の考えを価値付けた。

動きの局面	・児童の発言	○問い返し後の児童の気付き(教師による価値付け)
相手が打つ ボールを 待つ	・ボールを見る	○ボールが来る場所を予想しながら見る! (予想して待つことが大事。)
	・構える	○いつボールが来てもいいように構える。 (ボールにすぐに反応するためには、構えて待つことが大事。)
ボールに 向かって 動く	・ボールに 近づく	○すばやくボールに近づくと余裕ができる。 (余裕をもって打つためには、素早くボールに向かって動くことが大事。)
ボールを 打つ	・中心で打つ	○ラケットの中心で打つと、ボールが変な所にかずにまっすぐ行く。 (まっすぐ打つためには、ラケットの中心で打つことが大事。)
	・下から上へ	○腰より下からすくい上げるように打つとボールが高くなる。 (ラリーでは、ボールを高く打つことが大事で、そのためにはすくい上げるように打つとよい。)

(3) 運動の場の設定について

第4時では、第3時で考えた動きのポイントを意識して運動することができるように、複数の運動の場を設定した。運動の目的を示し、取り組む運動を選択させた。

提示した運動の場	運動の目的
キャッチ&ラリー	走って動くために(次につなげるために)
壁打ち	打ち方を安定させるために
フラフープショット	ねらった所にボールを打つために
ペアラリー	相手の打ちやすい所を考えるために
ダブルスラリー	相手の打ちやすい所を考えるために、味方との連携を意識するために

第5時、第6時では、メインゲームを2つ設定し、選択させた。「ラリーをつなぐゲーム」と「ラリーを断ち切るゲーム」の2つである。第5時まで「ラリーをつなぐこと」に対して技能の高まりを実感し、達成感を得た児童は、「攻防の楽しさ」を味わいたいという新たな楽しさに向けて学習を調整し始めた。「ラリーをつなぐゲーム」では、「相手にとって打ち返ししやすいボールを打つこと」、「ラリーを断ち切るゲーム」では、「相手が打ち返しにくいボールを打つこと」が重要であることを児童と確認し、ゲームを通して考えたことを全体で共有した。

(4) 抽出児童の様子から

事前のアンケートで「ボール運動が苦手」と回答し、第2時で、ラリーをあまりつなげることができなかったA児を抽出児童として変容を述べる。第3時において、A児は、所属するグループで積

極的に自分の考えを出し、動きのポイントを探った。さらに、全体共有を受け、「ボールを打つとき」のラケットの動かし方について、「ボールを下からすくい上げるように打つ」ということを自己が意識する課題として設定した。グループでの対話で発言していた「高く上げた方が安定する」という考えを実現するための打ち方を全体共有の場で知り、自己の動きに生かそうとする姿が見られた。実際の動きにおいても、下からすくうようにボールを打とうとする姿が確認でき、前時に比べラリーをつなげることができるようになった。その結果、A児は振り返りアンケートでも「前回よりもラリーをつなげることができた」「テニピンを楽しむことができた」と回答した。第4時以降の振り返りでも、目的意識をもち運動に取り組み、技能の高まりを実感している振り返りが見られた。

A児の振り返りの記述（下線部：目的意識、波線部：技能の高まり）	
第1時	テニピンの楽しさはラリーが続くことだと思う。
第2時	ちょっとだけラリーが続いたから。 次の時間では、真っ直ぐ打ちたい。相手が打ちやすいラリーを打てるようにしたい。
第3時	前よりも回数が増えたから。
第4時	打ちやすい所に打つことを意識して、ペアラリーやダブルスラリーをした。 <u>ラリーを前よりも続けることができた。</u> 仲の良い友達ともできて、前にも増して楽しかった。
第5時	<u>真っ直ぐ打つ、高く打つを意識した。</u> ダブルスラリーをして、みんなの良いところがわかった。次回もラリーをつなぐゲームがしたい。
第6時	<u>相手の打ちやすい場所（に打つこと）、ラケットの真ん中（で打つこと）、ラケットの高さ（打つ位置）を意識した。</u> ラリーが続いて楽しかった。友達とできたのが楽しかった。

(5) 学級全体の様子から

振り返りアンケートの回答を分析した。第2時から第3時にかけて「テニピンを楽しめた」という回答と「ラリーをつなぐことできた」の回答は同等の数値の上昇がみられた。（図4, 5）。また、第6時には、「テニピンを楽しめたか」に対して、全員が肯定的な回答をした。

児童が「テニピン」を楽しみ、技能の高まりを実感することができた姿と捉える。

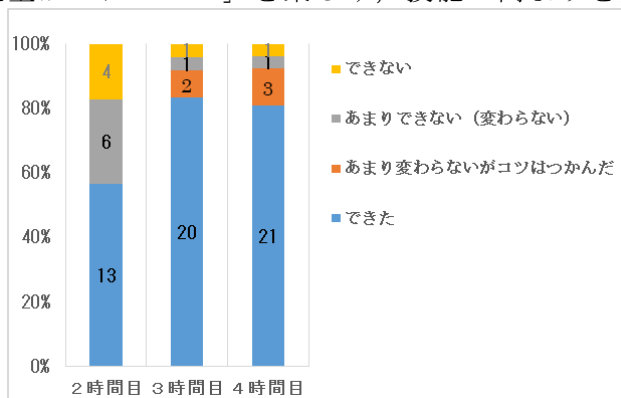


図4 振り返りアンケート「ラリーをつなぐことができたか」

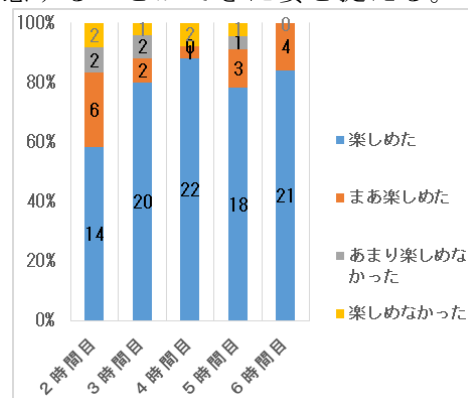


図5 振り返りアンケート「テニピンを楽しめたか」

4 実践1の成果（○）と課題（▲）

○ワードクラウドの活用し、「楽しさの共有」を行い、「動きを細分化」してよい動きのポイントを探らせることで、身に付けたい動きを理解し、運動の場を選択することにつながった。結果、児童に運動の楽しさと技能の高まりを実感させることにつながった。

▲「楽しむため」という目的は明確になった。一方で、教師が主導となり、技能に着目させた課題設定を行っていた。児童の思いを取り入れた課題設定を行うべきであった。

▲技能の高まりは実感させられたが、技能が定着したかの見取りが不十分だった。

5 実践2の実際と考察

実践1の成果と課題を踏まえ次の点を修正し、実践を行った。

○児童の困り感をもとに、動きのポイントを探るよう促す。【楽しさの共有→動きの細分化】

○体の部位に着目させ、どのように体を動かすのか言語化させる。【動きの細分化】

○教師による技能評価の実施をする。

(1) 楽しさの共有について

第1時では、試しの運動に取り組み、第2時では、第1時の振り返りの記述やアンケートの結果を提示した。ワードクラウドの「ラリー」「つなげる」「打ち返せる」などの言葉から、ラリーをつなげることがテニピンの楽しさの一つであることを共有した。また、振り返りのアンケートの結果から、「難しさ」を感じている児童が半数いることを示した。さらに、児童の記述をもとに技能面に関する困り感をまとめたものを児童に提示した。多くの児童が提示された困り感に共感していた。困り感を解決し、よりテニピンを楽しもうという意識が高まった。

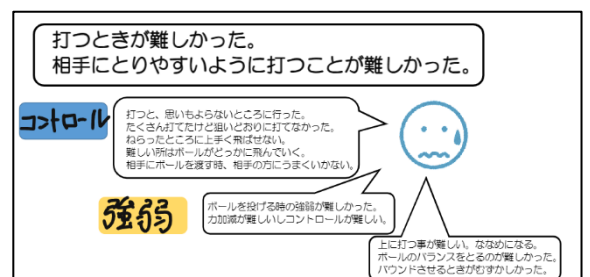


図6 児童に提示した第1時での困り感

(2) 動きの細分化について

みんなが見つけたポイント、つかんだコツ（7月11日）

【考えること】

- ・声をかけながらやる。
- ・打つ相手の名前を言って打つ。
- ・相手が打ちやすいように相手が取りやすいように投げた。
- ・速くやる。
- ・人のことを思いやる。

【コートを使い方/ねらうところ】

- ・前の方に打つ。
- ・相手がいる方向に打った。

【ボールを待つとき（ボールが来るとき）】

- ・速くに行きそうと思ったら、ちょっとだけ下がる。
- ・相手が打つ前にかまえる。
- ・狙ったとこに打つこと、1回バウンドしてからキャッチする。

【目線】

- ・しっかりボールを見て打つ。
- ・ボールを見る。

【手やうでの動き】

- ・ボールの強弱はうでを振ったり振らなかったり
- ・下から打つと良い感じに飛ぶ。
- ・下からだと高く上げてしまうから横から打つこと
- ・手のひらを上にする。

【ラケット】

- ・ラケットを上にする。
- ・ラケットを打つ側に向ける。
- ・ラケットの真ん中に。

【足】

- ・足は相手のところに向ける。

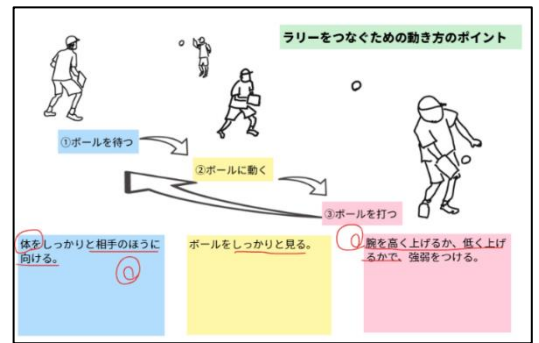


図8 第3時の児童の考えのまとめ

図7 児童と共有した第2時で児童が見つけたポイントやつかんだコツ

第3時では、「ボールのコントロール」と「ボールの強弱」につながる体の動かし方や考え方について、第2時で児童が記述したものを価値付けて共有した（図7）。運動の局面や体の動かし方を細分化して考えるように促し、ロイロノートを活用して、自分の考えをまとめさせ（図8）、共有した。全員が体の動きをもとに、自分の考えを記述することができた。

(3) 運動の場の設定について

第4時以降、第3時で考えたよい動きのポイントを習得するために、複数の運動の場とその目的を示し、運動に取り組ませた。第5時以降も児童から練習の場や時間が欲しいという意見があり、体育館を半分に区切り、ゲームに取り組む場と練習に取り組む場を設定した。



図9 児童の考えた練習方法「壁打ちラリー」

壁打ちとラリーを組み合わせたような練習方法（図9）を考え、グループで助言し合って、運動に取り組む、技能を高めようとする姿が見られた。

児童は、友達と協力して「ラリーをつなぐこと」の楽しさを味わい、運動に取り組み続けた。

(4) 学級全体の様子から

ラリーの回数の変化（図10）を「最小値」「最大値」「中央値」「平均値」の4つの数値について分析した。第2時から第4時までに数値の上昇が見られた。動きの細分化や場の設定により技能が高まった姿と考える。

振り返りアンケートの結果を分析すると（図11）、運動の選択後（第4時）に児童の肯定的な回答が上昇している。細分化して見付けた動きを意識して、運動に取り組んだ成果と考える。

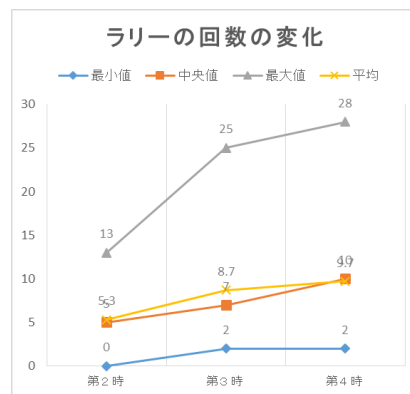


図10 ラリーの回数の変化

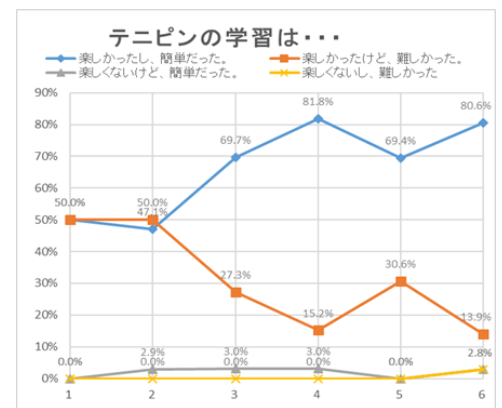


図11 振り返りアンケート

(5) 教師による技能の評価

単元の最後にラリーをつなぐ動き（技能）を評価した。評価の基準と該当人数は以下の通りである。

評価	評価基準	該当人数
A	10回のラリーで9回以上、相手が動かなくてもよい範囲に打ち返すことができる。	22人
B	10回のラリーで6～8回、相手が動かなくてもよい範囲に打ち返すことができる。	13人
C	10回のラリーで相手が動かなくてもよい範囲に打ち返す回数が5回以下	1人

6 実践2の成果（○）と課題（▲）

- 学びのスタートを「楽しさの共有」にすることで、単元を通して学習意欲を高く保つことができた。
- 困り感を共有することや運動局面に着目し、体の部位をどのように動かすかを考えさせ、言語化させることは、よい動きのポイントの理解や技能向上に有効である。
- 「場の設定」は、児童の気付きや願いを取り入れることで、児童が目的意識をもち意欲的に運動に取り組むことにつながる。結果、技能の定着にもつながる。
- ▲児童が求める運動の「楽しさ」は技能の向上により変容する。変容した「楽しさ」を十分に味わわせる場の設定や時数の確保をすることで、さらなる技能の向上につながる。と考える。
- ▲児童が適切な課題選択や課題解決ができてきているかを見取る評価に時間を要した。より効果的な方法を今後も実践を重ね追究していく。

【参考文献】今井茂樹『小学校体育新教材 個が輝く！「テニピン」の授業づくり』東洋館出版社、2021年2月19日